

西尾正道医師 講演会、今後の予定など

西尾正道医師 講演会 入場無料・予約不要

「内部被ばくを考える」

～福島原発事故後の望ましい健康管理のあり方について～

2018年 10月21日(日) 14～17時 13時30分開場

エルパーク仙台 5F セミナーホール

仙台市青葉区一番町4丁目1-1 《裏面地図をご参照ください》



左写真：乳がん（甲状腺がん検出のための超音波検査装置）。右写真：福島第一原子力発電所（東京電力福島第一原子力発電所）。

東京電力福島第一原子力発電所事故による放射性汚染の健康影響を巡って、専門機関において様々な意見が表明されています。福島県では今も避難指示区域住民や事故当時18才以下の子どもたち、経産局への長期継続的な健康調査が県により実施され、その中で、甲状腺がん、悪性腫瘍の子供たちが200人、健康調査されています（2018年11月現在）。事故初期の放射能レベルが通過した宮城県内や福島県外においては何らかの健康調査を行わなくてもいいのでしょうか。

西尾正道医師は人体内部におけるがんへの小腸癌治療に多用した放射線治療で、がんのメカニズムや放射線利用の原理に精通した第一人者です。セシウム・ヨウ素・ストロンチウムと呼ばれる放射性核種が子どもによる内部被ばくの実態や低線量被ばくによる健康への臨床的検証。また、1000倍ケラレにもものぼるトリチウムを含む汚染水の海洋放出が検討されていますが、あまり知られていないトリチウムのことについてもお話しいたします。子どもたちの未来のために私たちができること、福島原発事故（核汚染）後の望ましい健康管理のあり方をご一緒に考えていきましょう。

主 催：日本キリスト教団東北教区放射能問題支援対策室いずみ
共 催：宮城県民主医療機関連合会、日本キリスト教団東北教区宣教師委員会
生活協同組合あいこーぷみやぎ、日本カトリック医師会仙台支部
問合せ：Tel 022-796-5272 E-mail izumi@tohoku.uccj.jp

10月21日(日) 14～17時

エルパーク仙台 5F セミナーホールにて

東京電力福島第一原発事故により放射能汚染された被災地では、「原発事故による健康被害はなかった。」ということをも前提とした復興のあり方が加速化しています。福島県内でのモニタリングポスト撤去への動き、避難指示解除や解除に伴う無償住宅提供の終了。公共工事利用など放射性廃棄物の再拡散。第一原発敷地内タンクにたまり続ける汚染水の海洋放出の検討。さらには福島県が実施している健康調査、とりわけ、震災当時18才以下だった子どもたちへの甲状腺検査体制縮小の議論。これらはいずれも放射能による健康影響はない、もしくは、大変小さい、という前提に立った施策です。

放射能と向き合い続けなければならない宿命を負わされた地で、子どもたちのためにできること、一緒に考えていきましょう。

甲状腺検査の予定（詳しくはいずみHPをご覧ください）

こども甲状腺エコー検査 in 柴田町 10月28日(日) 於：柴田町「しばたの郷土館」

こども甲状腺エコー検査 in 角田市 11月25日(日) 於：角田市「オークプラザ」

「いずみ」の活動は国内外の支援活動によって支えられています。この活動を続けていくためにみなさまのご支援、ご協力をお願いいたします。献金、ご支援は下記専用口座をご使用下さい。

ご支援のお願い

送金先金融機関 ゆうちょ銀行

口座番号 02270-2-114887

加入者名 いずみの会

通信欄に 会費(一口2000円から)、又は、献金(支援)とお書き下さい。

※お送りしたニュースレターや郵送物が返送されるケースがございます。

転居などでご住所、連絡先が変更(する)した場合、いずみ事務局までどうぞお知らせ下さい。

運営委員長 布田秀治(いずみ愛泉教会)

運営委員 明石義信(常磐教会) 鈴木のぞみ(川俣教会)

保科 隆(福島教会) 布田秀治(いずみ愛泉教会)

室 長 保科 隆(福島教会)

顧問 篠原弘典(原子核工学専門家)

スタッフ 会津かよ子 笠松絹子 服部賢治

会計協力 渡辺広衛

日本キリスト教団東北教区

放射能問題支援対策室いずみ

UCCJ Tohoku District Nuclear Disaster Relief Task Force “IZUMI”

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1丁目13-6

TEL/FAX 022-796-5272

メールアドレス izumi@tohoku.uccj.jp

ホームページ <http://tohoku.uccj.jp/izumi/>

日本キリスト教団東北教区放射能問題支援対策室いずみ ニュースレター第11号 2018年 9月29日発行

いずみ

題字 丹治正雄氏

7年後の福島から

東北教区放射能問題支援対策室いずみ運営委員 明石 義信

大きな災害が連続する中で多くの人の命、財産、生活の土台が失われていることを思います。

そして今も「痛み」はいろいろな場所で生み出されています。7年前に起こった東日本大震災と、人災である東京電力福島第一原子力発電所の水素爆発事故を私たちは忘れることが出来ません。

そして、今も続いている被害があります。福島県の農水産物は風評被害の問題に苦しめられていますが、事故当初から現在に至るまで福島県沖で漁獲された海産物魚介類には「出荷しないで下さい。」という制限が加えられています。魚種によっては試験操業段階で放射性物質が基準値以下とされ市場に出荷されているものもありますが、野生の山椒やわらび、タラの芽などや農産物のこしあぶら、ぜんまい、たけのこなども制限されています。これはとりもなおさず、未だに安全が確立されていないことを指しています。



2014年9月に国道六号線が開通して物流の大動脈になっていますが、福島第一原子力発電所の側など、今でも、二輪車や歩行者が通行することを禁止されている地域があります。沿線には廃墟と化した街並みが、当時の姿そのままに残されている場所があります。そして、水素爆発事故当時にとれほどの放射性物質を体内に取り込んだかわからず不安をもつ人、今も残っている放射性物質が、今後どのような影響を与えるのか等の不安をもつ人々がたくさんいます。福島県では200人に迫る数の子どもたちが、甲状腺がんまたはその疑いが強いと診断され、150人を超える子どもたちが手術を受けている「痛み」があることは、消すことの出来ない事実です。

今年の3月に私が園長をしている保育園職員の「叔父さん」が、41歳で白血病を発症して亡くなりました。その翌日には第一子となる女の子が生まれました。地元で採用された彼は、第一原発の水素爆発事故直後に現場に駆け付け、水を撒くなど被害を少しでも小さくしようと懸命に働いていたそうです。放射線被害に起因する労災認定を受けたのは、彼で3人目だったそうです(9月4日現在では5名)。福島にいると、このような「痛み」が今でも身近にあることを見聞します。

私たち「いずみ」は、このような不安を感じている人々の中にあります。甲状腺検査や保養プログラム、訪問と傾聴の活動が、今でも必要なことをひしひしと感じます。制限が継続されていることは、農水産物を生み出す「土」や「海」の中に放射性物質が残っていることを物語っています。たとえ空気中の放射線量が減衰してきているとしても、場所によっては今でもとても高い濃度で放射性物質が存在しています。そして、命や、身体がむしばまれている人がいることも事実です。私たちは、その「痛み」に寄り添うことを教区として決議し、5年前から具体的に働きを始めました。7年という年月で消滅してはいない「痛み」がある限り、私たちは働きをやめることが出来ないと感じています。これからも皆様の祈りとご支援を心からお願い申し上げます。



「いずみ」は宮城県内各地の市民・住民の方々と協働して甲状腺超音波（エコー）検査を実施しています。今号では各地域で一緒に取り組んで下さっている複数の声をご紹介します。（表記のないものはいずれも2018年）

福島県外では、一部例外的な自治体を除いて、国や行政による放射能に関する継続的な健康調査は行われませんでした。そもそも、安定ヨウ素剤備蓄など、原発事故発生時の放射能被ばくを避けるための対策は一定準備されていましたが、実際にはメルトダウンしていたことすら公式確認されるのが事故から約3ヶ月経ってからでした。避難指示区域の周辺地域である福島県内外において、私たちは事故初期の放射能防護についてほぼ無防備な状況に置かれていました。事故原発では今も放射能漏れが続き、終息には途方もない時間がかかること。そして、セシウム137やストロンチウム90をはじめ、人工的な長寿命放射性核種が環境中に存在しています。

福島県内外を問わず、時間が経ってから、放射能のことを学び、子どもを被ばくさせてしまったことに対する不安を抱き、後悔を拭えない保護者は少なくありません。

低線量被ばくによる健康影響が晩発的に顕れてくる可能性を100%否定しきれない以上、放射能に関するアンテナを伸ばし続けていくことができるのは子どもたちの一番身近にいる私たち大人です。国や行政が消極的な姿勢を執り続ける中、「いずみ」はみなさまと一緒に、子どもたちの健康を見守る具体的方法の一つである甲状腺検査を必要とする方々に提供し続けていきたいと願っています。

子どもの健康を考える会・いしのまき

小山和良（石巻市）

福島原発爆発後、これから自分たちに何が起っていかの不安な日々が続いています。不安なこととして、特に気がかりなのは未来を担う子どもたちの健康です。その子どもたちを守るために自分がいつまで元気でいられるかと思悩むこともあります。

この不安とうまく付き合うために、日々変化していくからだを客観的にみる検査は大切なことと思います。学者でも医者でも国でも、解明されていないことの多い放射能のことですので、自分で経過を追っていくしかないとも思っています。そのために、検査の記録や日々の変化の記録も大事にしていきたいと思っています。

同時にこの漠然とした不安を分かち合える仲間や場所がとても大切だと感じています。私自身、夫とだけ不安を話していた頃より、1人1人仲間が増え、気持ちを話せたり、信じる情報が増えることで不安が減っていくのを感じています。もちろん将来の不安は減りませんが、それでも子どもたちが笑って力強く生きている未来を思い描きます。その未来の為に、食べさせるものや遊ばせるもの、声のかけ方や教えておくことを日々選択しています。この選択が正しいのかは分かりませんが、将来後悔するかもしれません。それでも今ある選択肢の中でより良いものを選びたいと思っています。

2018年5月、石巻で初めて実施された甲状腺エコー検査会は、たくさんの方とご縁で叶いました。検査会の中では、検査を受けられることを喜ぶ声を多くいただきました。検査を受けることができない間の不安は、私だけではなかったのだと実感しました。ぜひ、この感覚の共有をするためにも、この検査会が続くことと、ここで出会った方々と知恵を出し合い、共に元気に生きていきたいと思っています。



放射能汚染から子どもを守る実行委員会 in 加美 小林由美子（加美町）

私達の住む東北地方を中心として大きく揺れた「東日本大震災」、巨大津波は福島県の沿岸にあった東京電力福島第1原子力発電所にも押し寄せ、まさかの爆発事故を引き起こしました。「原発は安全、原発は人類の未来に明るい希望をもたらす」という神話が無残に崩れ落ちた日でした。

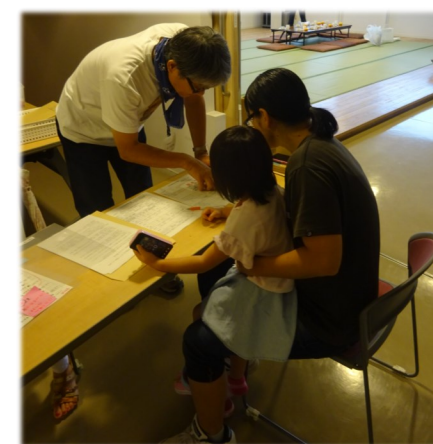
内陸に位置するここ加美町は地震の被害からはいち早く立ち直って元の生活に戻ったのですが、福島原発から飛び出た大量の放射性物質が風に乗って加美町の上空をも通過したことが、その後の調査でわかりました。あの日、なにも知らずに外気を受けて行動していた私達、いつもと同じに外で遊んでいた子ども達の身体に影響はなかったのでしょうか。

そんな懸念に突き動かされた町の有志の発案により、2018年3月25日に加美町で第一回となる「子どもの甲状腺エコー検査」が、中新田公民館において行われることになりました。

下準備として先ず2017年11月17日に和歌山県の医師、山崎知行さんにおいて頂き町民のための勉強会を開催、放射能の生体への影響について学びました。年が明けて2月中旬、広報紙やチラシで希望者を募る作業に入り、主として町内在住の5歳～25歳（事故当時18歳以下の子ども）71人が申し込んで来てくれました。

この検査に当り御尽力下さったのは「放射能問題支援対策室いずみ」という民間団体で、宮城県の子供達への健康影響を長期的に見守る取組みを2013年から始めているグループです。検査機器の一切を持ち込んで下さり、医師、技師、その上メンタルケアの方々までの総勢8人の布陣で朝9時には会場に来て下さいました。

広いホール内を間仕切りを使っの会場づくりでしたが、沢山の（年齢に合わせた）本類や折り紙やお絵描きのノートなど、来場者の緊張をほぐすためと思われる様々なものがスタッフと一緒にやって来たのには感心しました。会場に終始流れていたB.G.Mも、なんとなくホッとする雰囲気を作っていました、それら総てが支援団体の配慮でした。



あの事故が無ければ、こんなにも私達の生活に入り込んでくることの無かった「放射能」の文字、自覚が無くとも検査によってどんな判断が下されるのか、親も子も不安だったと思います。終了後、安堵の顔で帰られる御家族の姿は、この国が今なお抱えている問題を浮き彫りにしています。

起こってしまったことにフタをするのではなく、不安を共有する形で一つ一つ解決していく姿勢がどの年代にも求められていると思うのです。

もっと多くの子ども達が、自分の身体についてよく知る機会にもなるエコー検査を提供することの必要性を感じた一日でした。

「蔵王町甲状腺検査報告」サクラソウの会 平田淳子（蔵王町・2017年）

今回、三田さんからの一本の電話が私達に希望を与えてくれました。「『いずみ』という日本キリスト教団東北教区が設置した民間団体が、甲状腺の無料検診を実施しているのを知っていますか。もし蔵王町で受けてみたいという方がいましたら是非お知らせ下さい。」

こんな嬉しい事はありませんでした。早速の行動開始でした。2016年9月、大河原町で行われた『いずみ』の検診の見学から始まり、蔵王町議会でも町としての協力を要請してもらい、あらたな会の結成をする準備を進めました。

3.11後、「原発を考える会」を立ち上げて、空間線量測定をしてきた私達は、子供達のこれからの健康に不安を抱きながらもその取り組みは不十分で終わり頓挫していた訳ですからこんなに有難い事はありませんでした。

有志の方々に集まっていただき、あらたに「サクラソウの会」が結成されたことは、蔵王町の子供たちにとっても今後心強いものとなるでしょう。

2017年3月と4月、蔵王町で初めて実施された検診の申し込み人数をみても、いかに皆さんが不安をかかえていたのかと、しみじみ思いました。そして希望された方々全員の検診をしてもらえたことも本当に感謝！感謝です。今後も引き続き検診を継続できるように、私達も取り組んでいかねばと強く思っています。



「沢山の善意に支えられて」

小石族とかたつむり 笠間真由美（柴田町）

私達がいずみさんの甲状腺検査を手伝うようになってから3年が経ちます。その間に柴田町に対して「子ども達の甲状腺検査を定期的にしてほしい」という内容の要望書を提出したり、請願書を提出したりしてきました。請願に対しては、議会では採択されたのに町長のひと言でそれまでの議論が覆されるという経験をしました。

「検査の必要はない」それが町が出した答えでした。

結果は私達の意にそぐわないものでしたが、行政に対して働きかけて、同じような経験をされた団体の方が他にもいらっしゃることを知りました。小さな力でかなわないならもっと大きな力にしていくことも必要なのではないかと思うようになっていきます。今現在成長している子供たちに、またこれから生まれてくるだろう私達の子孫に対して、きちんと納得のいく結果を残すことが、今やるべきことだと思っています。

最近これまでの活動を発表する機会がありました。そのことにより、八方ふさがりのように暗かった道が一気に明るくなった気がするのと同時に、活動しているのは自分たちだけではないことがわかり、続けていく勇気をもらった感じがしています。今は、どのようにしたら納得のいく結果が得られるのか模索しながら、かたつむりのように、ゆっくりでもいいのでその歩みを継続していきたいと思っています。

最後になりますが、いつも温かい心で見守り接して下さっているいずみの皆様に心より感謝します。



サクラソウの会 高木克純（蔵王町）

蔵王町での検査は、昨年3月に次いで、今回、2回目の実施となりました。58名が受診し、昨年同様、全員再検査の必要なしという結果となり、ひと安心しました。

昨年は、祖父母との関係で不安をしまったままだったという方の申込みが数件ありました。検査の結果、安心できたとお帰りになりました。今回、初めての受診者が38名ありましたが、事故直後、湧き水を飲んだが大丈夫か、など依然として心配を抱えていた方が受診されました。検査を望みつつ未受診の方が依然おられると感じます。

検査は健康福祉課、教育委員会の支援を受け、健康福祉センターを借りて実施しています。チラシは、町内の幼稚園、保育所、小中学校、高校のすべての対象者に配布する体制が取れました。中学生以上だと事故当時、外遊びをしていた例も多く、その辺の話を教員からしてほしいと教育長にお願いし、その結果かどうか不明ですが、中学生の受診が増えました。

チラシは「サクラソウの会」会員の田村直子さんが原画を描き、「いずみ」のスタッフが構成してくださったものです。どんな検査をするのか、少し不安を抱えてきた子どもたちも、この絵のように「森の中の診察室」でちっとも痛くない検査だよ、と言うと、ニッコリ納得してくれました。また、「会」のメンバーが折り紙やDVDを持ち寄り、子どもたちが安心して受診できる場をつくってくれたことも大きいです。

サクラソウの会（3.11後の健康を考える会）は、故平田昇さんが中心となって立ち上げ、町に健康調査実施を要請してきました。しかし、容易に実現せず、その中で「東北教区放射能問題支援対策室『いずみ』」と出会いました。

「いずみ」の皆さんには、実に多大なる支援をいただきました。全国の支援を通して、この検診が支えられたことに感謝いたします。また、2年間、寺澤先生には、丁寧でわかりやすい説明をしていただき感謝です。小児科医としてのまなざしが、子どもにも保護者にも、確実に届いていると感じました。

一方、いつまでも「いずみ」の支援に頼ってられないと感じています。次回こそ、町主催での検査を要請していきたいと思います。



おいしい食事を召し上がれ。

怪我のないようにね。

うん。

うわあー。

セミの抜けがら
だぞお！！

ノッてきたっつー！！

たくさん遊んで、
のどかわいちゃった。

みんなのお別れが寂しいよう（泣）。

2018年8月2日～8月7日
第十二回親子短期保養プログラムで北海道
福島・宮城県内から六家族二十一名の親子が参加

参加者感想文（抜粋）

この度は、北海道保養プログラムに参加させていただき、本当にありがとうございました。（中略）

原発事故があって、生まれ変わったなあと思っています。それまでは、言われたことをそのまま受けとり、それが正しいかどうか考えたこともなかったですが、自分で調べ、考え、納得して決めるようになりました。食べ物も、水も、保養も、気をつけなくても何もなければいいですが、何十年か後に、「あの時はママも気にしすぎだったよね」と笑って話せばいいし、あとからやっぱり健康に影響がありました、とわかって、もうとりかえしがつかないと思うのです。

もう一つ、生まれ変わったなあと思うのが、元々私は知らない人と話したり、ましてや頼って何日も泊まりに行くなんて考えられませんでした。

今では、新しい出会いも楽しいし、夜の交流会も楽しみです。福島に住む事を悲しく思う事もありますが、福島に住んでいることで、私たちに心を寄せてくれる、助けてくれる、いっしょに考えて、話を聞いてくれる人たちがいることを知りました。今回の北海道でもたくさんの新しい出会いがあって、力をもらって、また明日からがんばろうと思います。（中略）

日本のあちこちで地震や災害があり、支援を必要としている人がたくさんいる中で、福島の事を思っている事に感謝します。私もいただいた優しさを少しずつお返ししたり、他の誰かに優しさを届けていきたいな…と思います。

なんか、まとまりのない文章になりましたが…

なかなか感謝の気持ちを伝えられないので、本当にありがたいなあと思っている事を少しでも伝えられていたらいいのですが。

本当にありがとうございました。（郡山市・40代母）

プログラム♪

8/2（木）航空機利用。札幌市の北海道クリスチャンセンターへ。

到着後、歓迎夕食会。交流。（～7日、センター泊）

8/3（金）札幌市内「さとらんど」での収穫体験。昼食（札幌北部教会）。

野外遊び。夕食は札幌元町教会でジンギスカン。

8/4（土）終日フリー。

8/5（日）終日フリー。

8/6（月）オプションツアー。積丹半島へ。野外遊び。温泉。

夕食はセンターで（真駒内教会）。分かち合い。

8/7（火）センター出発。航空機利用。仙台空港にて解散。

ようこそ！！札幌元町教会へ。

関係者・関係各所へのお礼（いずみ事務局より）

実施にあたってご協力いただいた北海教区東日本大震災支援委員会をはじめ、教区、教会員、クリスチャンセンターのみなさま、カトリック正義と平和仙台協議会、お祈りいただいたみなさま、全ての関係者に心よりお礼申し上げます。

9月6日に発生した北海道地震についての被害回復が進みますよう祈念して。